

会 報
 栃木県中学校長会

あ い さ つ

県中学校長会会長 鈴木 信

最近の世の中は、種々の意味において騒々しくなってきました。「国民の福祉のために」と堂々たる旗印は結構だが、よく考えて見ると国民がそれらの人々の踏台にされているのではないかとさえ思われることもあります。これに類することがだんだん多くなってきました。世の中に何か欠け、どこかで歯車の回転が狂ってきているように思えてなりません。教育界においても、そのような世相が反映されていることについては例外ではありません。教育行政面でもやりにくいことだとは思いますが、私達現場をあづかる校長にとっても校長の教育的信念とか学校経営の方針とか、重要施策には耳を傾けようともせず、ただひたすらに我が子だけにとらわれ、校長の方針とは逆行することさへ現われそうな気配もあります。その気持は、世相と併せ考えればわからないでもありませんが、といて手をこまねいて嘆いているだけではすみません。そんな時父兄の年齢層を考えて見ると、これらの人々は約20年～25年前、私達か、もしくは同僚によって教育された人々であります。あの当時の教育界の状態を思い起して見た時、教育の重要性と共に、教師としての責任を痛感せずにはおられません。

52年度は中学校教育30年を迎えます。全日中においても記念事業が計画されています。本県においても、各地区代表委員により研究中であります。いずれにしても、これを契機として、中学校教育をかえり見ることは極めて重要であります。50年度本県においては「ひとりひとりが豊かに伸びる中学校教育」の主題のもとに、関プロ中学校長研究協議会栃木大会が開催されました。本年は「将来の展望に立つ中学校教育の改革」と題して全日中長崎大会がもたれ、また最近「教育深層審議会の中司まとめ」が発表になりました。教育にたずさわるものの総力をあげて、過去を顧み、現状を把握し、将来を展望

してあるべき姿を思考することは意義深く、またその時機に来ていることを感じます。

本県とて世相の渦の外にあるものではありません。しかし本県の教育正常化は全国的に有名であります。その中であって、名実共に正常県にふさわしい教育栃木の建設はどうか私達に与えられた当面の課題であります。私は去る総会で決定された重点目標達成のため、運営方針に従い、事務局は勿論、各専門部の活動と全会員の共通理解を基に、かつて関プロ栃木大会で各県校長の賞賛を得た、あの強力な協力と団結の力に支えられながら忠実に、全力を傾注して努力してまいりたいと存ずる次第であります。

~~~~~  
**関プロ群馬大会要項**  
 ~~~~~

期日 昭和52年6月15・16・17日
 会場 前橋市婦人青少年センター、県民会館など
 参加人員 900人(本県割り当て55名)
 全体協議題 転期にたつ中学校教育の課題とその解決策 (将来を展望する中学校教育とそのあり方、提案 新潟・群馬・埼玉)
 分科会協議題

- (1)新教育課程の編成とその問題点について (埼玉・群馬)
- (2)留意を生かした学校裁量の時間の運営について (新潟・群馬)
- (3)部活動の問題点とその改善策について (栃木・群馬)
- (4)社会環境の変化に対応する生徒指導のあり方について (神奈川・群馬)
- (5)高校入試の改善と進路指導のあり方について (長野・群馬)
- (6)学校運営組織における主任の役割について (茨城・群馬)
- (7)小規模学校ならびにへき地学校における学校経営について (山梨・群馬)
- (8)専門職としての教師の資質向上方策について (千葉・群馬)
- (9)教員養成制度の諸問題とその改善策について (東京・群馬)

注 本県の参加は10月5日の理事会において、次のとおり割り当てられた。
 宇都宮6) 河内2) 上野3) 芳賀5)
 栃木2) 小山3) 下野4) 塩谷4) 北那須
 (8) 南那須3) 佐野2) 安藤1) 足利4)

昭和52年度 栃木県中学校長会会計予算書(案)

1. 収 入 2,800,800円
2. 支 出 2,800,800円

収入内訳

項 目	52年度 予算額	51年度 予算額	比 較		摘 要
			増	減	
1. 会 費	2,124,800	1,743,000	381,800		7800×166…負担金
2. 繰 越 金	310,000	336,774		26,774	5000×166…私費
3. 振興対策費	166,000				教育振興費 1000×166
4. 雑 収 入	200,000	200,000			利子および福利厚生部より
計	2,800,800	2,279,774	521,026		

支出内訳

項 目	52年度 予算額	51年度 予算額	比 較		摘 要
			増	減	
1. 会 議 費	160,000	160,000			
(1) 総 会 費	50,000	50,000			総会補助
(2) 会 議 費	110,000	110,000			理事・協議員・専門部会等
2. 事 務 局 費	982,000	920,000	62,000		
(1) 事 務 費	150,000	150,000			通信・消耗品費
(2) 事務職員手当	682,000	620,000	62,000		事務職員給与手当
(3) 旅 費	150,000	150,000			旅 費
3. 事 業 費	830,000	592,000	238,000		
(1) 研 修 費	122,200	100,000	22,200		研修費
(2) 刊 行 費	429,800	380,000	49,800		会報・記念誌印刷
(3) 専 門 部 費	112,000	112,000			1,600×7
(4) 振興対策費	166,000		166,000		1000×166
4. 分 担 金	713,800	498,000	215,800		
(1) 全日中分担金	581,000	415,000	166,000		3500×166
(2) 関ブロ分担金	132,800	83,000	49,800		800×166
5. 積 立 金	30,000	30,000			
(1) 積 立 金	30,000	30,000			事務職員退職金積立
6. 雑 費	35,000	32,000	3,000		
(1) 雑 費	35,000	32,000	3,000		広告・借用代・燃料代
7. 予 備 費	50,000	47,774	2,226		
(1) 予 備 費	50,000	47,774	2,226		
計	2,800,800	2,279,774	521,026		

関ブロ新潟大会に参加して

関東ブロックの中学校長研究協議会が、各県代表約1,000名の参加を得て盛大に、しかも有意義に開催されましたが、その概要をご紹介します。

昨年の第27回は「ひとりひとりが豊かに伸びる中学校教育」に視点をおき、その改善策につき研究され、その果敢的研究協議が上越市、雪の町高田の厚生会館で開催されました。昨年は一年も前からその準備に迫られ寝食を忘れて活躍し、温かく参加者を迎えて実施した苦勞を憶つゝ、大会に参加しました。新潟県の中学校長諸兄もさぞかし容易な事ではなかったろう。そんな事を思い出しながら宿舎、会場に向つたが、いたれりつくせりの歓迎や準備には心から感謝いたしました。日本海に面した都市はどこも静かな、すみ切った青空(天候に恵まれて)にいろどられ、なにか研修の場にふさわしい会場でした。

1. 名称 第28回関東甲信越地区中学校長研究協議会新潟大会
2. 主題 教育の転換期における中学校教育の特質役割の究明と実践方策
一豊かな人間性の育成を目指して一
3. 期日 昭和51年六月十七日十八日
4. 会場 上越市厚生南会館大ホール
5. 日程

(1) 全体会議、型通りの開会式終了後、柏崎市立第1中学校長、清水八郎氏から、全体協議会につき提案説明があった。その概要は、中学校における今日的課題として ①価値観の多様化した今日、望ましい目標を設けて学校経営を推進してゆけるか、人間像を描いていても、具体的な方法論が確立されていないのではないかと ②内容が豊富、過密、高度化されたといわれているが、量的な問題とともに指導法に対する反省と研究が不足ではないか、また個別指導をさけて一斉指導になっていないか、③高校入試は中学校教育に影響があるが、制度改善がない限り現実順応より方法はないのだろうか、入試の過熱が教育の荒蕪を招いているとはいえないながらも、それを是認あるいは助長しているような学校経営を行っていないかなど現状分析から要を得た現実の問題の提案がなされた。

(2) 分科会 第1日目の午後は、本大会の主題に基き、九分科会に分かれ、午後四時三〇分まで各会場で、熱心に研修された。その結果は翌朝速報で配布され、第2日目の全体協議で一分科会3分以内で発表された。その概要は何れ機関紙中学校に発表されるとの事なので省略する。

(3) 第2日目の全体協議
全体協議に先立って文部省から所官事項の説明があり、続いて分科会の発表、最後に大会宣言が採択された。採択された決議の内容は次の通りである。

1. 豊かな人間性を育成するためのゆとりある教育課程の実現を期する。
 1. 中学校教育充実のための条件整備を期する。
 1. 中学校教育の役割を一層明確にし、社会教育 家庭教育との緊密な連携を図る
 1. 専門職として期待される教師の研修とその制度の充実を期する。
 1. 人材確保法の完全実施を期する。

(4) 記念講演
東京大学名誉教授 末広恭雄先生から「魚の知恵」と題してスライド、映画を利用したの感銘深い講演があり、一般教養として未知の魚の世界を知ることができ、肩ぐるしい大会の後、日本海に面した静かな都市、上越市にふさわしい記念講演であった。

(喜連川中学校長 渡辺忠男)

昭和51, 専門部役員

- ◎ 長 ○ 副
- 調査部 ◎塚原(河) ○仲島(芳)
- 研修部 ◎飯田(幸) ○渡辺(河)
- 編集部 ◎小林(幸) ○吉高神(河) ○桑島(由)
- 職員対策部 ◎坂野(幸) ○増淵(河) ○菊池(幸)
- 進路対策部 ◎篠原(幸) ○横田(幸) ○小竹(幸)
- 修学旅行部 ◎上野(幸) ○栗原(由) ○和気(倫)
- 福利厚生部 ◎小川(幸) ○上野(河)

長崎大会に出席して

「長崎はきょうも雨だった」10月13日の夜、そして翌日まで雨は降り続いていた。大会第1日午後分科会の終わる頃には、明日の快晴を告げる空模様が変わっていてわれわれもホッとした。会場の公会堂の南蛮屏風のどんちょう、町に沢山見うけられるカステラ、べっ甲、ちゃんぽんの絵や文字などすべてが平和記念像とともに長崎を象徴するのも知らない。宿舎矢太楼は矢太郎岳の山頂にあり、そこぶる眺望のきくところで、国体のおりには天皇皇后のお宿だったとかである。大会第一日は定刻に開会し、参加者2,023名と発表され、「古いものが新しいものを生かし、新しいものが古いものを生かす長崎市、西洋文化継承の地長崎……」に始まる大会 谷委員長の挨拶があった。渡辺政務次官からは「人材確保法の第3次給与改善に対しては、本国会で成立させるために文部大臣が国際会議出席を断念し、わたくしが、近く総選挙もあるのに、票にならないナイロビへ出席するようになった」とユーモアを交えて心強い挨拶があり、場内を沸かせた。

第1日全体協議のあと、郷土芸能の発表があったが、ステージせましと舞う「蛇おどり」はまさしく長崎の誇る文化財であり、その豪快さには心打れるものがあつた。金の玉を迫り蛇はかなり大きなもので、長さも10数メートルもあろうか、控えの要員が2,3交替で舞うからにはたいへんな重労働だ。

「もって来い」、「もって来い」の掛け声に幾度ものアンコールでこたえての熱演は今なお感銘が深い。午後から、それぞれ会場を異にして8つの分科会が持たれたが、本県は第6分科会「中学校教育正常化のための高校入学者選抜制度の改善について」の担当ブロックであつたし、小生も出席していたので、この様子をお知らせしたい。司会には真岡、山前の横田正一校長が立ち、発表者の一人に佐野、西の小竹正美校長が当たられた。選抜制度の問題としては高校間の格差は認められなければいけないし、学校の特色という形であることが望ましいのではないかな。なお、なぜ中学校長がこのことについて悩まなければならぬのだろうか。どちらかといえば行政サイドにおいてシステム化を図るべきである……という意見も出ていた。次に改善の方向と

しては①学区の縮小 ②入試科目軽減 ③推せん入学の方法などが考えられようとしている。さらには、小竹校長から進る指導の立場で、今こそ校長の進路指導に対する確たる識見が必要であり、すでに高学歴＝ホワイトカラー＝高賃金というパターンは一部くずれようとしている傾向のあることを指摘していた。大会開会式、全体協議、午後からの分科会など終了した第1日夕刻宿舎で、本県勢は心なごむ夕食会があり、鈴木 信会長の挨拶の中で 横田、小竹両氏に謝意が述べられた。翌15日、文部省説明があつたが、とくに白井中学校教育課長から、「大改革ではないけれども、するめいかの味がする教育課程の改訂だと考えている」加えて、「ゆとりのできた時間を学校の創造性や独自性に委ねたいけれども、いっぽう、ある種の歯止めがあつたほうが……」との意見もあるので、今後検討したい」という話があつた。その他質問に対する回答もあつたが紙数の関係で省略したい。記念講演は、「セミナーヨ教育とキリシタン文化」と題して、片岡弥吉先生（純心女子短大副学長）から、1580年に創立された日本のすぐれた教育機関が、当時南蛮文化発展の中心的存在であつたことなど、老令にも似ぬハリのあるお声の講演があつたが、これを最後に全日中長崎大会の全日程を終了し、疲労と安堵の交錯した気持は小生だけであつたらうか。

南の国より西の国は遠隔の地だと感ぜられた北九州の長崎、そして島原には切支丹にまつわる多くの歴史も残っている。さらには広島と同様原爆の被災地でもあつた長崎、彼の地はわれわれをほんとうに優しく暖かく迎えて呉れたような気がしてならない。飛行機や新幹線が、比較的短時間に往復させているけれども、西の最はて長崎大会に参加して爽りのある見聞をして非常にすばらしい体験を得たという実感がある。しかし、小生が、この栃木をこよなくよきところと感じているのは不思議なことなのだろうか。参加者の皆さん、ほんとうにお疲れさまでした。疲れを残したまゝ執筆する。

〔編集後記〕 宮中校長 森 永 信 雄

第2号は極めて多忙の鈴木会長から原稿をいただき、さらに新潟大会、長崎大会の参加報告の原稿を渡辺、森永両校長からいただき紙面を飾ることができました。会員諸賢のよい年を迎えられんことを念じて、本号をお届けします。(編集部 小林)